

平辭

辰年にわたって

京都大学基礎物理学研究所

理論物理学界の大先達として、私にち後進の
研究を支援し、励してこられたに、三村剛一先生
が、この世を去られ、お別れになりました。もはや永久に、先生と
談笑する機会は無くなりましたので、何ともしえ
ない淋しさを覚えます。

三村先生が波動線何学を提唱されたのは一九三四年のこと
でありました。二十世紀の初頭から一九二〇年代にかけて物理
学はその根柢から変革されました。特に量子力学の出
現は微視的世界が巨視的世界と全く違つたものであること
が明確になりました。しかし、このころには、電子その他
の素粒子の存在空間の四次元世界における存在の仕
方が巨視的物体と如何に異なるかが問題になってお
り、存在空間そのものは巨視的と変わりがないと

時空

021-130-010-010
[206 020 T65-1]

(2)

打もろいのであり

考えられておりまして。三村先生は、こういう情況の中で
 微視的時空に關する新しい考え方を発表されたのであり
 ます。
 それ以後、今日にいたる三十年間に物理学は大きく変わり
 ました。特に最近、十数年に数多くの素粒子や共
 集準位が発見されるは。それに伴って最近ま
 やく微視的時空の構造が比較的少数の物理学
 の間で問題にされるようになってまいりました。先生
 は広島大学において多くの研究者を養成指導し、
 またそれらの人々と協力して、幾何学の発展に
 努められました。したが、その意義はむしろ今後の理
 論物理学の発展の中に見出されるのではないかと思
 います。それを見とどけることなく先生が他界され
 るのは、残念な事でも残念な事としてあります。

先生の先見の明を今までの如く痛感す
 るのであります。

京都大学基礎物理学研究所

(三)

しかしが

主宰され

京都大学基礎物理学研究所

の研究者の方々は、必ずや

先生の創設された理論物理学研究所、先生の遺志を以て、今後の理論物理学の発展に大きな貢献をするであろうことを信じています。

先生の御逝去の報に接し、往時を追憶しますと、次から次へとあつたかと思ふことがあつて、いろいろおかげを表現しつゝ、ことばに窮するに達して、~~先生~~先生の御逝去の哀悼の意を表します。

すも次第であります。

昭和四十年十月二十七日

京都大学基礎物理学研究所長

湯川秀樹

最後の節の前にいれる。

先生はもともと大変御丈夫な方でありまし

た。もしも先生が広島で原爆を体験されたら

ついたら、もつともつと長生きされたに違いない

と、~~思~~いいと思います。私たちは~~皆~~松本

をこの地球上から一掃するにめにより一層の

努力をしなげればはうはいと痛感いたします。